

# 扇状地の開発と集落

富奥の所在する扇状地扇中央部は地下水位が低く、また河川によって運ばれた石礫<sup>いしれき</sup>が堆積するため、農耕地の開発は困難でした。しかし農具の発達などにより、この地の開発は飛鳥時代から本格的に始まり、奈良時代から平安時代の初めにかけて、爆発的に拡大します。

富奥地区にある多くの遺跡からはこの時代の集落跡が確認されています。集落からは当時の人々が居住した<sup>たてあなじゅうきよ</sup>竪穴住居や<sup>ほったてばしら</sup>掘立柱建物の跡が見つかり、<sup>はじき</sup>土師器や<sup>すえき</sup>須恵器といった土器が出土しています。

出土した土器の中には、墨で文字の書かれたものがあり、また<sup>はぐち</sup>フイゴ羽口や<sup>てっさい</sup>鉄滓など製鉄の道具なども見つかっており、当時の文化・技術の一端を知ることができます。



下新庄アラチ遺跡



竪穴住居（粟田遺跡）